

---

# 腹を空かした狼男

悲劇のM

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

腹を空かした狼男

### 【Nコード】

N8493F

### 【作者名】

悲劇のM

### 【あらすじ】

あるところに、一人の狼男がいましたとき。ちゃんちゃん。

「腹減ったなあ……」

俺は狼男。鬱蒼とした森の中で、木にもたれかかって呟いた。くそつ、もう昨日から何も食べてないぞ。

最近は人間が山の動物を乱獲するせいで、獲物が全然捕まらねえ。俺はいつも腹を空かしているのさ。俺のことを考えないなんて、人間ってのは身勝手な生き物だぜ。

俺の食い物の中で一番美味しいのは人間なんだが、ここらを通る人間は銃とかを持ってておっかねえ。小娘や婆さんが食うのに丁度良いんだが、そんな都合良くいるわけないよなあ

今日何度目かのため息をつくど、どうだろう。遠くの獣道に赤い頭巾を被った一人の小娘がいたのさ。

よしつ、こいつを食べてやろう。俺は思い立ち、狼男の能力で人間の姿に変身してからその小娘へと歩み寄り、声をかけた

「ようお嬢さん」

小娘は安心した様子で笑いかける。

「こんにちは」

とその時、俺の鼻は何か良い匂いを察知した。少女の手には、美味そうなパイが沢山入ったバスケットが提げられていたんだ。俺の腹が音を鳴らせる。

こいつは丁度いいや。前菜として、パイを頂こうじゃないか。

「お嬢さん、俺はすごく腹が減っているんだ。どうだろう、そのパイを分けてくれないか？」

「うーん、これ病気のお婆さんに持っていくパイなんだけど、一個くらいなら問題ないわね」

ん、ん、お婆さん？ ほう、こいつは婆さんの家へ見舞いに行く途中なのか。よし、そうとわかれば娘だけじゃなくて婆さんも一緒に食ってやろう。

とりあえずは目先のパイを貰い、それを平らげる。ものすごく美味いリンゴのパイだった。さあ、パイの次は美味しい小娘と婆さんのメインディッシュだ。

「お嬢さん、パイを食わせてくれたお礼だ。俺もお婆さんの見舞いにいかせてくれ」

「あら、それはいいわね。お婆さんもきつと喜ぶわ」

「そうと決まれば、美味しいパイが冷めないうちに早く行くこうぜ」

「ええ」

俺と小娘は、森の中を歩いていった。

森の奥深くに、婆さんの家はあった。小娘が小さな木小屋の戸を叩く。

「お婆さん、お見舞いに来たわよ」

数秒後、ギイツという音と共に戸が開けられた。そこには腰の曲がった一人の婆さんが立っていた。

「あら、この方は？」

「道で知り合った人よ。お婆さんのことを話したら、一緒にお見舞いに来てくれたわ」

俺は「どうも」と会釈をする。

「あらあら、わざわざどうも。ほら、早くあがりなさい」

俺と小娘は、いっしょに小屋へ上がる。うん？ 何だかパイとは違った良い匂いがするぞ。台所の方からだな。

「猪肉のシチューよ。昨日からずーっと煮込んでたから、すごく美味しいわよ」

「ダメよお婆さん。寝てなきゃいけないのに」

「孫が見舞いにくるんだもの。寝てなんかいられないわ。それに、今日は特別な方もいらっしやってるしね」

何だよ、初対面の俺に親切にしゃがって、食いづらいじゃねーか。この婆さんまさか、俺が狼男だって気付いてやがるのか？ いやいや、そんなはずはない。俺の変身は完璧なはずだ。考えすぎなんだ

ろっ。

「みんな、お腹空いているでしょう。早くご飯にしましょう」

婆さんの言葉に、俺と小娘はテーブルに座った。小さな椅子に似合う、小さなテーブルだ。

婆さんは三人分のシチューを盛った。湯気が立つシチューが、俺や小娘の前に並べられる。銀のスプーンに映る俺の顔は、笑っているように見えた。

婆さんが自分の分のシチューをテーブルに置くと、「それじゃ、いただきますしよっか」と言った。

一口、慣れぬスプーンでシチューを口に運ぶ。俺はハツとした。人間以外に、こんなに美味しい物があつたのか。猪肉は口の中で柔らかくとけて、その濃厚な味を口の中に広がらせた。そして何より、温かかった。

シチューを食べ終わると、今度は小娘の作ってきたリンゴのパイ。さつき一人で食べた同じものよりも数倍美味かった。

楽しい食事の時間は、すぐに終わった。俺はすっかり満腹になった。婆さんが立ち上がり、俺と子娘に言った。

「今日は泊まっていきなさい。うん、それがいいわ」

「ええ、そうさせてもらっわ」

「お、俺もいいのか？」

俺がおずおず聞くと、婆さんはにっこりと笑った。

「ええ、もちろんですよ」

ふっ、こいつは丁度良い。寝込みを襲って二人を食うことにしよう。今から夜が楽しみだぜ。

夜中、俺は借りた寢室をこっそりと抜け出し、婆さんと小娘の寢室へと向かった。

戸を開ける。木が軋む音がなるが、起きだしてはいない。忍び足で二人が寝ているベッドへと歩み寄る。

夜目に慣れてくると、とても気持ちよさそうに寝ている婆さんの

枕もとに、一冊のノートがあるのがわかった。どうやら日記帳らしい。どれ、ちよつと覗いてみるか。

○月 日、明後日は孫娘が遊びに来る。美味しいシチューを作つてあげよう。今から明後日が楽しだ。

○月 日、シチューをつくる為の食材が足りない。仕方なく、爺さんの形見の時計を売つた。これで美味しいシチューが作れるが、また思い出が一つ減つた。

○月 日、孫娘と共に、知らない男の人がやつてきた。無愛想だがとても良い人で、いつまでもここに居てほしいと思つた。孫娘のパイも美味しく、今日はとても楽しい一日だった。こんな日が永遠に続くといいのに。

くそつ、何だよ。何が楽しい一日だ。お前はもうすぐ俺の腹の中だつてのに。

ばたと日記を閉じる。  
寝てやがる。ち、のんきな婆さんだぜ、明日は小娘と一緒に俺の腹の中だつてのによ……。

ひらりと一枚の写真が日記から落ちた。そこにはぼわつとしたかわいい女の子を婆さんが幸せそうに抱いていた。二人とも、笑つていた。

ぶん、ほんとにうまそうな小娘と婆さんだぜ。

俺は夜中のうちに狩つた猪や新鮮なリンゴを、婆さんの小屋のそばに置いた。婆さんや小娘を食うのは、シチューやパイに飽きてか

らだ。それまで食わないでおいてやる。狼男にだって、人間以外に美味いと思える食い物はいくらでもあるのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8493f/>

---

腹を空かした狼男

2010年10月8日15時44分発行